

第1セッション コメント

柳澤 雅之

京都大学地域研究統合情報センター

お二人のお話を聞いていて、バンコクは交通渋滞が有名ですが、車だけではなく水も渋滞することがよくわかりました。どちらのお話からも共通して、水の渋滞が起こる経緯の一端を理解することができたと思います。

■ タイの意思決定メカニズムは 水路や輪中堤の建設にどう影響したのか

私がコメントしたいのは、大きく言えば意思決定メカニズムについてです。お酒の場にしろ、もうすこし真面目な場にしろ、バンコクの渋滞について議論すると、バンコクという都市が急拡大して、都市計画が追いつかないということが常に言われます。しかし、行政側から言えば、もちろんなんらかの都市計画があり、合理的な考えで都市計画が立案されているという反論が出てくると思われます。本当に都市の急拡大が原因なのか、それとも都市計画そのものの不備が原因なのか、よくわからないところがある。今日のお話には、そういうところにも関連する話が出てきたのではないかと考えています。

具体的に言いますと、たとえば星川さんのお話に、バンコク近郊で水路や輪中堤を建設する話が出てきました。水路があって、それを遮るように輪中堤が建設された。これはどのような意思決定メカニズムでそうなったのか。水路には、もちろん建設された理由がある。輪中堤も同様です。その両者が、どのような交渉をして、最終的な意思決定をしていったのかという問題です。

当然、水を防ぐことが大切なのか、利用することが大切なのかという議論がなされたと思います。そのときに、最終的にどのようなメカニズムで、あるいはどのようなプロセスで水路を切るようにして輪中堤が建設されたのか。それを見ることによって、輪中堤の建設にあらわれている都市拡大の論理と、排水や灌漑、水路建設にあらわれている農業生産促進の論理と

があり、そういう都市対農村の対抗関係がおそらく見えてくるのではないかと思います。

■ タイ全体における農業生産の意味と 農村と都市との対抗関係をどう考えるか

いまの話はもう少し大きな目で見ることでもできます。星川さんのお話で、チャオプラヤ川流域全体の話がありました。デルタ全体はそもそも19世紀後半から20世紀初頭に農業的な空間として開発されました。星川さんのお話は、そのなかでも主に1983年以降の話です。1983年以降は、ご存じのとおり、タイ全体が大きく変化した時代です。農業生産について言いますと、水稻の高収量品種の栽培面積が広がる。果樹や野菜などいろいろな商品作物が入る。作付作物が変わるにつれて土地利用が変わり、水利用が変わる。

たとえば、1980年代のデルタの上流部での水利用に関する研究があります (Molle, F., and Keawkulaya, J., 1998. "Water management and agricultural change: A case study in the upper Chao Phraya delta," *Southeast Asian Studies*, Vol.36, No.1 pp.32-58.)。それによると、水稻の高収量品種やサトウキビなどの商品作物が1980年代に入る。そのために排水路を掘り、さらに排水路の水位を下げる。農地を守るために小さな堤防も作る。そうすると、かつて遊水池としての機能もあったような農地に、水が入らないようになっていく。そこに入らない溢れた水は、メイン・ストリームに行く。メイン・ストリームにどんどん水が集中することで堤防が嵩上げされ、その流れの先にバンコクがある。星川さんが指摘したように、バンコクそのものが、チャオプラヤ川全体の栓になってしまって、水が詰まる。

このように考えると、タイ全体で農業生産にどのような意味をもたせるかを考える必要がある。あるいは、都市をどの程度、守るのか。つまり、農業と都市との対抗関係、あるいは、国にとっての農業と工業との対抗関係をどのようにするのかという大きな話になる。両者の論理がどうぶつかりあい、意思決定がどのようになされているのかという話になると思います。そこについて何かお考えがあれば、星川さんにぜひお聞きしたい。

それから、星川さんの話の最後でダムの話が出ていました。今回の洪水では、基本的にダムの影響は少ないという前提でお話しされていたと思います。しかし、農村と都市とのバランスをどうとるかを考えるときに、必要な水利操作のポイントは、ダムの操作ではなくおそらく水門の操作であろうと思われます。河川あ

るいは水路で、だれがどのような理由で、いつどのように水門を操作するのか、あるいはポンプを稼働させるのか。政府の規定とは別に、イリーガルな操作や水利用を含め、個々のたくさんある水路、水門の操作がどのように行なわれているのかを見ることで、さまざまな意思決定メカニズムが見えてくるのではないかと思います。

■ 個々のレベルと地域のレベルで 洪水に対する選択はどのようになされたのか

次に、岩城さんのお話は、かつて美しい都市であったバンコクが、どうして現在これだけ渋滞するのか、いろいろ考えさせられるお話でした。主にターゲットとされていたのは、20世紀初頭の50年間くらいですね。そのなかで岩城さんの最初のお話は、個々の家が減災のためのシステムをもっていたという話だったと思います。

それはその通りだと思いますが、その後1950年代以降になって、タイがデルタの開拓をして、バンコクの発展があって、都市整備を進めるプロセスがありました。最初におっしゃっていた減災の時代は、洪水に対して一軒一軒の家が対応する個々の対応だったわけです。ところが星川さんのお話では、家が個別に対応するよりも、堤防を造る、あるいは輪中堤を造るように、集落やある一定の範囲がまとまったかたちで洪水に対応してきたわけです。

つまり岩城さんがお話しされた時代は、個々の家が水位の上昇や洪水に対応していたであろう。けれども1980年代以降は、もう少し組織だった対応になっていた可能性がある。そうすると、20世紀初頭から1980年代の間のどこかで、個々の家がどう対応するのか、あるいは個々の家をどのように造っていくのか、地域で輪中を造って対応するのか、輪中で個々の家はどの程度の減災を考えればよいのか等について、さまざまな選択が個人レベルでも地域レベルでもなされていたのだと思います。では、建築史から見て、洪水にどのように対応しようとし、どのように意思決定がなされていたのか。

このように考えると、星川さんと岩城さんのお二方のお話が、洪水対策に見る意思決定ということにつながるのでないかと思います。このことをもうすこしジャンプして言えば、その意思決定メカニズムのあり方が、タイの物事を決めるプロセスとおそらくどこかで通底し、その結果できてきたのが、趣旨説明にあったタイのかたちなのではないかと思いました。



研究者・学生・NGO関係者など45名が参加した

応答

星川 意思決定のプロセスという切り口からコメントをいただきました。

■ バンコクを守ることが優先され 堤外は自己防衛しかない状況

星川 まず水路と輪中堤に関する意思決定については、サームワー運河が不自然に出っ張った輪中堤で切られているという話をしました。なぜあのように不自然に出っ張っているかという、当時あそこにミンブリーという都市の市街が、サームワー運河にまたがるかたちで突き出していたからだと思われます。それで不自然ながらもそのようなかたちで切ってしまった。そこにどのような意思決定があったかという、ほとんど都市を守るという論理しかなかったと思います。対立する利害というよりも、一方的に都市を輪中化するということを決められた。

都市と農村、工業という意思決定についてのお話もありました。バンコクでは定期的に防水対策整備計画を策定し、出版しています。それを見ますと、バンコクを守ることをメインにして、それに灌漑局が協力するかたちの計画を立てている。これもまた都市とかバンコクを守るという意思決定のもと、一方的な利害のもとにこれまで決められてきました。それに対して堤外の一般住民は、住居の建て直しなどで自己防衛するしかないということだったのではないかと考えています。

ダム操作、水門の意思決定というお話もありました。これについては灌漑局が、いつの時期にどれだけ放水して、それをどの水門が受けるということを決めております。どれだけ作付されるのかということも、灌漑局が意思決定しています。

■ 1960年代以降の生業変化、暮らし方の検証から 洪水対策を考える必要性

岩城 現在の洪水対策の様子をみると、かなり混乱があると言えるのではないかと思います。たとえば、3月にノンタブリーのある住宅を見に行きました。そのある一家は、一つの家は高床式住宅で床高をキープしている。もう一つはさらに床高を高くして「スーパー高床」にしている。一方でその対岸にある家は、洪水はあまりこなくなったので、地床式住宅みたいな床高の低い家を造っていたのです。

今回の洪水が起こったとき間接的に聞いたのですが、床高が低い家を新しく建てた人も、「もう一回高床に戻さなければだめだ」と話していました。また、「やっぱり政府の洪水対策は信用できない」と話していたりもします。

ですから、1960年代から1980年代の一つの流れとしては、経済的な側面の影響がかなりあると思われます。ノンタブリーでは、現在でも農業をしている人がけっこういます。日本ではあまり報道されていませんが、今回の洪水被害でロンスアンの農作物は全滅です。タイでもっとも高いドリアンの産地はノンタブリーあたりにあるのですが、そのあたりの農地、果樹園が全滅して、木がすべて枯れているのです。果樹というのは、植えてから最低5年くらい収穫までに時間がかかるのですが、それがすべて水没してしまいました。

一方で、それでも被害の少ない人もけっこういたわけですね。兼業農家のケースと、専業で、ブランドとして農業をしていた方たちとで、かなり被害が違ってたりする。そういう人たちは、家の造り方の意識が大きく変わってたりすることがある。

ですから、柳澤先生のご指摘どおり、1960年代あるいは80年代の洪水対策、地域に流れ込む水の変化、あるいはその地域の住宅の変化と生業変化、ライフコースみたいなものを検証していかなければいけないと思っています。今年の8月にはそういう調査をしたいと考えているところです。

第1セッション 質疑応答

森田敦郎(大阪大学人間科学研究科) 私も数年前からエンジニアの研究を始めようと思っていて、その関係でおよそ考えていた話があったところに洪水が起こりましたので、今回のお話は関心をもって聞かせていただきました。

私は主に星川さんにおうかがいしたいのですが、洪水や溢水が起こると、いつもRID(タイ王立灌漑局)が槍玉に上がるというか注目されます。実際に、全体のきちんとしたマスタープランがなかったのだと思いますが、全体のプラクティカルなプランでは、灌漑局は基本的・実質的にはBMA(バンコク都)に対する補助的な役割をしていたと考えてよろしいでしょうか。

つまり今回のお話を聞くと、広域でどのように水をうまくはけさせて、流通させるかが洪水防御でもっとも重要だったと思いますが、それについてRID独自のプランや計画など考えているものがあつたわけではなくて、どちらかというとバンコク都が出してくる首都防衛プランに協力するかたちで、たとえばオペレーション対策とか、そういったものを受け身的に考えるという理解でよろしいのかという質問が一つです。

もう一つ、水門のオペレーションをRIDが決めているというお話でした。そのとおりだと思いますが、このような洪水の場合には、もっと細かいレベルでの操作というか、日々変わる流量に対するリアルタイムでの開け閉めが重要になるのではないかと思います。そういったところについてのRIDの方針などがありましたらお聞かせください。

山本博之(京大地域研) まず星川さんにうかがいます。タイを研究されている方には基本的なことなのかもしれませんが、星川さんのご報告にバンコク都と政府という言い方が何回か出てきました。バンコク都と政府というのは、意思決定の主体としては別のものなのでしょうか、同じものなのでしょうか。そもそもバンコク都の範囲はどこまででしょうか。輪中堤の内側だけバン